

視覚障がい者向け「ひな山」の制作と活用

吉田 健・降幡好華・永松義博・杉本和宏

南九州大学環境園芸学部
e-mail : gracilistryla1125@gmail.com

Production and Application of Hina-yama for the Visually Impaired Persons

Takeshi YOSHIDA · Mika FURIHATA · Yoshihiro NAGAMATSU and Kazuhiro SUGIMOTO

Faculty of Environmental Horticulture, Minami-Kyusyu University

Summary

“Hina-yama” is a display of ornamental dolls in miniature gardens in the image of nature for the girl’s festival to pray for the good health and growth of young girls at Aya-cho, Miyazaki Prefecture, since the Edo period. The tradition of Hina-yama has been declining due to a decrease in the number of Hina-yama artists. The Hina-yama Festival is the biggest spring event in Aya-cho. This paper describes the production of a Hina-yama display designed especially for the visually impaired persons so that they can participate in and enjoy the festival.

Keywords : Healing, Hina-yama, Visually impaired persons
癒し, ひな山, 視覚障がい者

はじめに

宮崎県の綾町では女の子が生まれると親戚や近隣住民が粘土で土人形を作り、山や川で集めてきた古木、奇岩、奇石で綾町の大自然を表現し、花木などを持ち寄って座敷に山の神が住む風景を再現した「ひな山」を作って祝う。綾町では女性は山の神とされており、通常のひな飾りより山の神が住むにふさわしいもので御祝いたいという想いから「ひな山」が作られたと言われ、大きいものでは畳4畳分のももある。

人間は外界からの情報の8割以上を視覚から得ていると言われていて、視覚を除いた感覚を通してこの素晴らしい綾町伝統文化のひな山を視覚障がい者にも楽しんでもらいたいと考え制作を行った。

今回、視覚障がい者向けのひな山を制作するにあたり、事前に都城視覚障害者福祉会の会員に手すりや点字に関するアドバイスをいただき、これまで鑑賞のみを目的としていたひな山を、触って楽しむことができるように考案した。

完成したひな山は、平成26年2月15日、16日に宮崎市の宮崎観光ホテルで開催された九州盲人福祉大会に展示し、参加者に聞き取り調査を行って、「ひな山」の新たな活用形態についての考察を行った。

制作過程

本研究では、本来のひな山の制作過程を参考に、より本物のひな山に近く、触れた人が綾町の自然を感じられるように「触れる”ひな山”」をテーマに制作を行った(第1図)。

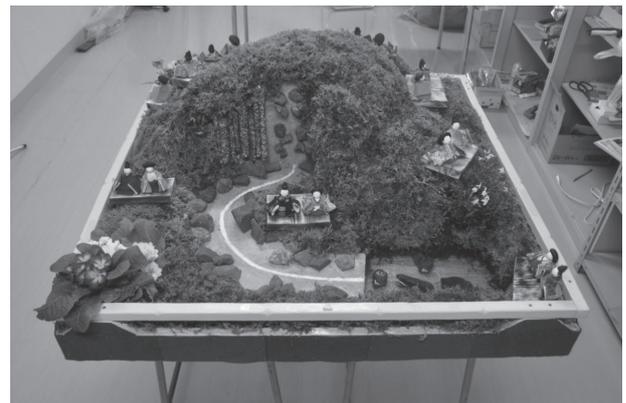


Fig 1. Hina-yama for the visually impaired persons.
第1図. 視覚障がい者向けのひな山.

1) 基礎の防水

本来のひな山は箱庭の形状であり、座敷に設けられる。水が染み出すのを防ぐために、基礎部分にはビニールシートで防水を施している。視覚障がい者向けひな山にも同様の防水施工を行った。

2016年6月6日受付.

人植関係学誌. 16(1):41-44, 2016. 実践報告.

2) 骨組み作成

本来のひな山では、農業用コンテナを積み上げておまかな骨組みを作成するのに対し、木材を組み合わせて骨格をつくり、隙間にはペットボトルを詰め、持ち運びやすいように軽量化を図った。

3) 飾り付け

視点が正面からに限られる従来のひな山は触って全体を知ることが難しく、どの方向からでも触れられるようにするため、中央部に山をつくり、四方になだらかな傾斜をつくった。スケール感のある構成にするため、樹木には樹形や枝張りがよい松や梅を用いるのが一般的であるが、視覚障がい者向けのひな山は触れて楽しむことを目的としており、枝張りが良いものや針葉の植物を使用すると問題があると考えられたことから、樹木は用いずにコケの触感を楽しむようにした。

聞き取り調査の中で視覚障がい者は、視覚の代わりに触って物を判別するため、指先の感覚は非常に敏感で、ケガをすると何もできなくなってしまうので制作に注意が必要とのアドバイスが得られたことから、使用する石についても触り心地の良い丸みがあるものを選んで使用した。

4) 山の起伏の造成

木材やペットボトルの骨格の隙間には杉の葉を入れて山の起伏を表現し、その上にはコケを張って野原をイメージしてもらえるようにした。

山の位置は、外側から触りやすいように中央部を高くし、四方からも手を伸ばして触りやすい大きさに調整した。

5) ひな人形の制作

江戸時代から伝わる伝統的なひな山は土人形を用いるが、近年は多くの場合、既製品の人形が使用されている。

視覚障がい者向けのひな山では、触って人形の質感や表情の違いを楽しんでもらうため、紙粘土で人形の土台を作成し、着物は触感に違いがある和紙、ちりめん、フェルトの3種類の材料を用いて作成した。

都城視覚障害者福祉会の会員に試作した人形を触ってもらい、最も触りやすいとの意見が得られた3cmほどの大きさで作成した。

人形の表情も触れて楽しめるように、顔には鼻と口を作り、表情がわかるように形を整えた。

ひな人形の制作過程が知りたいとの意見もあり、雛人形への関心が高いことが窺えた。そこで、実際にひな人形に触れて制作の過程がわかるように、ひな山とは別の14×41cmの木の板の上に、紙粘土の土台、袴着用、上着着用、袖・帯の着用の4段階の人形を置き、点字テープで説明を加えることによって制作過程

を展示した(第2図)。



Fig 2. Production process of the doll from the left to the right.
第2図. 人形の制作過程(左から右).

6) 水の流れと溜池の設置

滝からの水の流れを表現するために発泡スチロールを使用した。触って水の流れと判断することは困難であった。都城視覚障害者福祉会の会員から「川の流れは溝があれば流れを指で辿りやすく流れだとわかりやすいのではないか」とのアドバイスを頂き、発泡スチロールの流れ部分に溝を彫り、溜池までの誘導線とした。

流れの先に深さ2cm程度の溜め池をつくって本物の水を溜めた(第3図)。



Fig 3. The flow and reservoir of the river.
第3図. 川の流れと溜池.

7) 手すりの設置

都城視覚障害者福祉会の会員から、ひな山の周囲を回って楽しむには手すりを伝って回る方が安心感もあるという意見があったため、掴まりやすいように手すりを設置した(第1図)。正面中央の手すり上面には三角形の印を設置して基準点とし、手すりに掴まりながら全体を回れるようにした。また、伝いながら距離感をつかみやすいように、20cmごとに切込を入れた。

視覚障がい者には、視覚を持たない全盲者と残存視覚がある弱視者がある。手すりは弱視の方に見やすいよう黄色に着色した。

8) 植物の配置

花の色の識別は困難なため、それに代えて嗅覚で楽しんでもらえるように、香りのするパンジー、アリッサム、ジュリアン、ハゴロモジャスミンを四隅に配置した。都城視覚障害者福祉会の会員の方の話によると、視覚に障害のある人は一度も色を見たことがなくても色には興味があり、常に想像しているそうである。視覚に障害があるという理由で色の説明をしないのではなく、色を把握し、想像してもらうために、それぞれの植物の正面の手すりに植物名と色を記した点字の透明テープを貼ることで想像しやすいようにした。

9) ひな山の説明

いきなり水や石に触れたとき、視覚に障害のある人は恐怖を感じてしまうという。そこで点字で作成した説明文には、あらかじめ本物の石やコケや水を使用していることを説明した。滝や川、池の位置も説明文に記し、ひな山全体の形、滝や池の配置、植物の位置関係を把握できるようにした。三角形の印を正面の基準点としてスタートし、香りのする花のある場所を四つ角として、手すりに沿ってひな山の周囲を回って鑑賞できることを説明した。各面の手すりの上面に貼った点字の透明テープには、その正面に配置されている植物名や池、滝、人形を記したほか、設置した人形の土台にも点字で男雛と女雛の違いを記した。

聞き取り調査の結果

完成したひな山は、2月15日、16日に展示を行い、視覚障がい者の人にも体験してもらい、感想や要望などの聞き取りを行った(第4図)。その結果を実感、触感、感動、要望に区分し、第1表にまとめた。



Fig 4. Display of the specially designed Hina-yama for the visually impaired persons.
第4図. 視覚障がい者向けひな山の実物展示.

視覚障がい者の中には旅行を楽しむ人も多く、これまで実際に綾町でひな山を見学したことがあるという

Table 1. Voices from the participants of the visually impaired persons.

第1表. 聞き取り調査結果.

実感	今までどんなものかわからなかったが、今回よくわかった。
	実感ができる。
	考えて作っていることがよく伝わる。
	よく考えて作ってあると思った。
	山があって、自然の風景がよく分かった。
	綾には行ったことがあるが、その自然の感じがよく分かった。
	本物を使っているから、自然を感じることができる。
	綺麗にできていて、人形が可愛らしかった。
	とても人形の表情が分かって、持って帰りたいと思った。
	日本庭園をイメージすることができた。
触感	花、土、苔の香りがいい。
	花の香りも楽しめて良かった。
	説明があつてわかりやすい。
	色の説明もしてあつてとても良かった。
	制作過程の見本があつてイメージしやすかった。
	しっとりとした苔の触感がとても心地よい。
	苔を初めて触った。
	景色に触れたのがいい。
	山の高さがとてもちょうどよく、触りやすかった。
	説明がなくても、触っただけで形がわかる。
感動	手すりは、溝の間隔もちょうどよく、距離感がつかみやすい。
	人形の大きさがちょうどよく、顔もとても分かりやすかった。
	男雛、女雛が工夫してあり、区別することができた。
	制作過程もわかって、良かった。
	制作過程を作っているのが面白い。
	手すりに沿って回ることができ、楽しめた。
	とてもいいアイデア。
	すべて手作りというのがとてもすごいと思った。
	最高の一日となった。
	驚きと喜びがある。
要望	思う存分触ることができて嬉しかった。
	たくさん触って、楽しめた。
	着物の素材が違って面白かった。
	実際に触れるものは少ないので、触れるだけで本当に嬉しい。
	視覚障がい者用という意識がありがたい。
	音声と点字ではわからないことも多い。
	音も入れてほしい。
	水は事前に言っておかないと困る。
	野鳥の声や、川のせせらぎの音があるとより想像ができて楽しめる。
	滝は、空気等を出しても何かが落ちる感じは伝わると思う。
綾町は吊り橋のイメージが強いから、吊り橋を作ってほしい。	

人もいた。しかし、そこでは触ることができなかったため、今回はじめてコケや石、水などに触れ、花の香りを嗅いで楽しむことができ、ひな山がどのようなかを理解できたという。また、事前に新聞やニュースなどでこのひな山の存在を知り、関心を持った人も多く、鮮明に自然の風景を想像することができてうれしかったという感想もあった。九州大会においては「ひな山」という行事を知らない県外の人も多かったが、人形や植物の触感を楽しみ、宮崎の伝統行事に関心を持ってもらえたと思う。

人形の制作過程を示したことにより、人形に関心を持った人が多く、中には実際に自分で作ってみたいという人もあった。文章だけではイメージしづらい制作過程を、段階を示したことで作り方を理解しやすくなったと考えられる。素材などについて詳しく尋ねる人もいた。また、着物を異なる三種類の素材で制作したため、ガイドヘルパーと材料を確かめるなど、楽しそうに会話する様子が印象深かった。

今回は、触覚と嗅覚に対応したひな山の制作を行ったが、聴覚にも訴えるような作品づくりの要望が多く聞かれた。川のせせらぎや鳥のさえずる声がすると、

より一層想像力が掻き立てられるということがわかった。

また、「ひな人形といえばひな壇」、「綾町といえば大吊橋」というように連想するイメージを持つ人も多く、普段触れないものだからこそ触ってみたいという要望を聞くことができた。

考 察

今回、視覚障がい者向けのひな山を制作したことにより、触って春の訪れを感じてもらうことができた。花の香りやコケの触感による癒し効果とともに、新たな季節の感じ方としてのひな山の福祉的側面を窺うことができた。

一方で、ハゴロモジャスミンやアリッサムなどの香りだけでは不足に感じるという声も多く、今後の新たな活用形態として聴覚に訴える仕掛けと、簡潔で理解しやすい説明方法が課題として挙げられた。

聞き取り調査で、「旅行に出かけたり、美術館や博物館に行くことがあっても、触って楽しむことができるものは限られているため、残念に思うことが多い」との意見があり、視覚に障害がある人への配慮が十分進んでいない現実が浮き彫りとなった。その一方で、感動したので是非また作ってほしいとの意見も聞かれ、安心して全部を触ることができ、コケの冷たさ、着物の肌触りの違い、花の香りの違いなどを存分に体験することができるこのひな山は、視覚障がい者にとって想像力を膨らませる効果が高いものであると考えられた。元来、健常者が見て楽しむ「ひな山」を上述のように制作することによって、視覚障がい者の方々にも触れて実感してもらい、実体験として社会の行事に参加する機会を持っていただく助けとなるものと考えられる。

摘 要

宮崎県綾町に江戸時代から伝わる「ひな山」は、桃の節句に女兒の健やかな成長を祈願して座敷に綾の山の自然を再現し、その中に雛人形を飾る雛飾りである。家族がひな山づくりを専門とするひな山師と協力して制作してきたものであるが、近年、ひな山師の減少により、家庭単位でのひな山制作は行われなくなってきている。一方、その伝統を活かそうと綾町では毎年「綾ひな山祭り」と称して、綾の商店主が趣向を凝らしたひな山を制作するなどし、春の一大イベントとして親しまれている。本研究では、目の不自由な方でもひな山を身近に感じ、楽しんでもらえるように工夫したひな山を制作した。

引用文献

- 小野聡悦. 2006.8. 宮崎県綾町のひな山について. (社)日本造園学会九州支部, 研究・事例報告集 Vol.14, 平成18年度長崎大会: 7-8.
- 塩崎千絵. 2007.11. 「ひな山」に使用される植物について. (社)日本造園学会九州支部, 研究・事例報告集 Vol.15, 平成19年度熊本大会: 49-50.
- 國分亮. 2010.11. 宮崎県綾町の「ひな山」について. (社)日本造園学会九州支部, 研究・事例報告集 Vol.18, 平成22年度熊本大会: 41-42.
- 永松義博. 2011. 宮崎県綾町の「ひな山」について. 日本造園学会誌, Vol.74 造園技術報告集 No.6: 99.
- 塚原遼祐. 2012.11. 都城市・三股町での「ひな山」制作の取り組み—綾町の「ひな山」を参考事例にして—. (社)日本造園学会九州支部, 研究・事例報告集 Vol.20, 平成24年度宮崎大会: 81-82.